

ソソロケシ 「渋」

蜂 矢 真 郷

『時代別国語大辞典上代編』（以下『上代編』と示す）に項は立てられていないが、ソソロケシ「渋」という形容詞が奈良時代末にある（片仮名の左傍線は上代特殊仮名遣の乙類を表す、以下同様）。

匱澁 澁字不是正 宜為澁字 上荒 下之夫之 曾と呂氣之 『新訳華嚴経音義私記』

〔匱澁 澁字は是これ正せいならず、宜よろしく澁字と為すべし、上（匱）字は荒し、下（澁）字は之シ夫フ之シ、曾と呂氣之〕

「不…正」を、「正ただしからず」と訓むと、間違っている意ということになってしまいが、「俗字」に対する「正字」ではない意であるので、「正せいならず」と訓むのがよい。「澁」が正字、「澁」が俗字（「渋」は「澁」の略字）という関係である。

『新訳華嚴経音義私記』は、音義書（ないし音義）と呼ばれる文献である。

音義書とは、元々中国において、漢文で書かれた仏典・漢籍から字句を抽出し、その字句に対して、音注（漢字の音読みについての注）や義注（漢字の意味についての注）を記したものであり、音注の「音」と義注の「義」を合わせて『く音義』という書名となるものである。日本で作られた音義書は、基本的に仏典から字句を抽出し、音注や義注とともに、多くはさらに訓注（漢字の訓読みについての注）をも記したものである。

『新訳華嚴経音義私記』については、岡田希雄氏「新訳華嚴経音義私記倭訓攷」（『国語・國文』11-3 [1941.3]、後に単行書 [1962.1 京都大学国文学会]）、小林芳規氏「新譯花嚴経音義私記解題」（古辞書音義集成1 [1978.5 汲古書院]）に詳しい。

『上代編』の付録である「資料解説」の「新訳華嚴経音義私記」の項は「撰述の年代は奈良時代末期か、少なくとも平安時代初期であろう。」としているが、小林氏は「本邦人の手の加わった音義書としては、現存する最古の書物として注目されるものである。」「本書の書写時期については、本文の字体や和訓の形式、上代特殊仮名遣の使われ方などから、奈良時代と認めて差支えないであろう。」とされる。『新訳華嚴経音義私記』の上代特殊仮名遣は、『古事記』（と『万葉集』巻五の一部）にのみあるモ甲乙の区別を別にする上、「上代特殊仮名遣はトを除きおおむね区別して用いられている。」（前掲「資料解説」）と見られていて（よって、先に「ソソロケシ」と示した）、『新訳華嚴経音義私記』は奈良時代末期の成立と見られる（『日本語学大辞典』『東京堂出版』、「音義」の項、築島裕氏執筆）ものである。

さて、ソソロケシは、ケシ型形容詞（ケシを末尾に持つク活用形容詞）の一つである。ケシ型形容詞については、前書『国語派生語の語構成論的研究』[2010.3 塙書房]「第四

篇」に詳述した。サヤカ「…君が上はさやかに聞きつ（左夜可尔伎吉都）…」（『万葉集』卷二十・四四七四）―サヤケシ「…川見ればさやく清し（左夜氣久清之）…」（『同』卷十三・三三三四）、スミヤカ「速」（救）て速かに滅（タ）令（シ）む。（西大寺藏）『金光明最勝王經』平安初期点・春日政治氏釈文）―スムヤケシ「…速（速）く（須）牟（也）氣久」はや（帰）りませ（…）（『万葉集』卷十五・三七四八、ミームの母音交替）、アカラカ「丹（丹）ラカに（暉）れること頻（頻）婆果の如し」（大阪青山大学藏）『弥勒上生經贊』平安初期点・中田祝夫・築島裕両氏釈文）―アカラケシ「…端（端）つ土（土）は（膚）赤（赤）らけみ（波）陁（阿）可（良）氣美」…」（『古事記』応神・歌謡四二）など（へ）内は原文）のような、カ・ヤカ（ヨカ）・ラカ（ロカ）を末尾に持つ形容動詞語幹と対応するものと、ナガケシ「ながけくもたのめけるかな世（の）中を袖（そで）に涙（なみだ）のかゝる身をもて」（『大和物語』、和歌）、ネヂケシ「其ノ國王ノ心極テネヂケクテ」（『今昔物語集』卷四・三十一話）、ツユケシ「ひとり寝る床は草葉にあらねども秋くるよひは露（つゆ）けかりけり」（『古今和歌集』一八八）などのような、その対応を持たないものがあり、前者を一次的ケシ型と、後者を二次的ケシ型と呼んだが、二次的ケシ型は上代に見当たらない。

ソソロケシは、それと対応する形容動詞語幹ソソロカの例が見られるので、一次的ケシ型に入れられる。ソソロカの例は、次のようである。

漣〔漣〕 不滑也 曾と呂加奈利〔新撰字鏡〕

漣〔漣〕 滑らかならざるなり、曾と呂加奈利〔新撰字鏡〕

漣〔漣〕 ソ、ロカナリ 刺〔刺〕 疎〔疎〕 苛毛已上同〔色葉字類抄〕 黒川本

『新撰字鏡』『色葉字類抄』の「漣」（漣）字は、水の湧き出る音、ないし、水の流れる速いさまを表す字であるが、「不滑也」の意とは合わないので、本来「漣」字であったと見られる。

また、名詞ソソロの例もある。

唐韻〔唐韻〕 云〔云〕 鳩〔鳩〕 曾と呂説文鷲鳥食已吐〔其皮毛如〕 丸也〔和名類聚抄〕 伊勢十卷本

七、「鳩」の項

〔唐韻に云はく、鳩（略）曾と呂、説文に、鷲鳥、食ひ已り其の皮毛の丸き如きを吐く也〕

鳩〔鳩〕（略）ソ、ロ（平上〇）下正〔類聚名義抄〕 観智院本・仏下末一八「10ウ」

『和名類聚抄』の例は、「鳩」字に訓「曾と呂」があるものであり、中国の『唐韻』に「鳩」とあるが、同じく『説文』に、鷹など猛禽類の鳥を表す「鷲鳥」が他の動物を食べ終わりその皮や毛を丸い形にして吐き出したものを「鳩」と言う、とある意である（補った返点は、狩谷掖斎『箋注倭名類聚抄』によったが、『大漢和辞典』の「鳩」の項が引く『説文』の例と同じである「後に引く『岩波古語辞典』とは少し異なる）。なお、『大漢和辞典』（「鳩」の項）は、「鷹鷲などの猛禽が鳥獣を食ひ終つて吐き出した皮毛の、丸い形をしてゐるもの。」「としてゐる（「鷲」は、はやぶさの意である）。

そして、『類聚名義抄』の例の、アクセントおよび清濁を表す声点（「平」は低いアクセント、「上」は高いアクセント、「〇」は声点がないことを示し、声点が二つある双点のものは濁音であることを表すが、この例は単点である）によると、ソソロ「𪗇」の第二音節は清音と見られる。

他方、ソゾロ「漫」[「この君の、かくそゞろなる精進しやうじんをしておはするよ」]（『蜻蛉日記』）は、スズロ「漫」[「漫々スゞロ（平上）」]（『類聚名義抄』図書寮本・二四、「上」の右傍線は、声点が双点〔濁音を表す〕であることを、「遊」は出典が『遊仙窟』であることを示す）との母音交替ととらえられるので、ソゾロ「漫」の第二音節は濁音と見られ、よって、ソソロ「𪗇」とは清濁が異なり、別語であると考えられる。

また、右のソソロカ「洩」とは別に、ソソロカ「聳」[「ただち、そゞろかに物ものし給たまふに、太ふとさもあひて、いと宿徳しゆくとくに」]（『源氏物語』行幸）の例がある。これは、動詞ソソル「聳」[「…白雲しらくもの千重ちへを押し別わかけ天あまそゞり（安麻曾と理）高たかき立山たちやま…」]（『万葉集』卷十七・四〇〇三）が接尾辞力を伴ったものと見られ、そそり立つように丈が高いさまを表すものであるので、ソソロカ「洩」とは意味が異なっていて、別語であると考えられる。

右に挙げたソソロケシ「洩」・ソソロカ「洩」・ソソロ「𪗇」の例から見て、ソソロケシ「洩」は、口や喉を通りにくいように、なめらかでなく、すらすらは進まないさまを表すと考えられる。「洩（澁・澀）」字は、「洩滞」の「洩」でもある。『新訳華厳経音義私記』の「澁」字の別訓であるシブシ「洩」は、味覚の一種を表すが、口や喉をすらすらとは通らない意でもある。『新撰字鏡』のソソロカ「惣と」字の例には「不ふ滑也」という義注もあり、なめらかでない意である。『和名類聚抄』のソソロ「𪗇」の例も、鷹などが食べ終わったものが、全ては口や喉をすらすらとは通らないで皮や毛を丸くして吐き出したものが、ソソロであるということであり、口や喉をすらすらとは進まないことの結果を表していると言える。

前掲岡田氏は、

澁字の今一つの訓ソゾロケシは恐らくソゾロ此の語、古くソソロとなつて居たか、ソソロであつたかは、明言できなからう。類聚名義抄下末一八は声点を指し乍ら、濁点とはして居ないから出た形容詞でソゾロハシ、ソゾロガマシなど、似た語であらうが、（松井博士の国語辞典に漏れる）後の新撰字鏡、類聚名義抄、字鏡集などの索引にも見えない。さてソゾロケシの仮名は、（略）ソソロのソソも安麻曾會利万葉集一七〇〇三のソソと同義とすれば、曾々で可い訳である。但し不明である。

〔割注の形は一行に示す。また、『新訳華厳経音義私記』『万葉集』の引用の他は、旧字体を新字体に改めた。〕

とされるけれども、先に述べたように、ソゾロケシでなくソソロケシとして、ソゾロ「漫」ともソソル「聳」とも異なると見るのがよいと考えられる。

なお、『岩波古語辞典』〔初版・補訂版〕〔岩波書店〕は、

そそろ 〔𪗇〕 鷹が鳥を食へ終つて、その毛を吐き出したもの。「𪗇、和名曾々呂（そそ）、鷲鳥食已吐（そそ）其皮毛（そそ）如丸也」（和名抄） 一か〔惣とか・粗こか〕 けば立ち、

なめらかでないさま。「恣、不<sub>レ</sub>滑也、曾曾呂加奈利(がなり)」(『新撰字鏡』)。「恣・疎・苛毛、ソソロカナリ」(『伊呂波字類抄』)。「け・し」「匱けし」「形ク」 荒いさまである。「匱・荒、曾曾呂氣之(けし)」(『華嚴音義私記』) † sōsōrōkēsi

としている(†印は上代特殊仮名遣の意、ö・ë は乙類を表す)が、『新訳華嚴音義私記』のソソロケシの訓は、「匱・荒」字に対してではなく「澁」字に対してのものである点で、正しくないと思われる。「匱・荒」字に対する訓と見た結果が「荒いさまである。」意であるとすると、これも些か異なることになる。

また、『日本国語大辞典』〔初版・第二版・精選版〕〔小学館〕は、

**そぞろけ・し**「漫」〔形ク〕(「けし」は接尾語)そびえ立つように高い。背丈などがきわめて高い。

としているけれども、「そぞろけ・し」のように第二音節を濁音とするのも、「漫」字を当てるのも、ソゾロ「漫」ともにとらえたことによると見られ、また、「そびえ立つように高い」意などとしているのはソソル「聳」・ソソロカ「聳」ともにとらえたことによると見られて、先に述べたことから見ると、いずれのとらえ方にも問題があると考えられる。なお、『岩波古語辞典』は、ソソロケシ「洪」をソゾロ「漫」ともソソロカ「聳」とも別語としていると見られる。

以上、ソソロケシ「洪」は、奈良時代末の例と見られ、ケシ型形容詞の例であって、ソソロカ「洪」・ソソロ「旭」との関係などにおいて重要な語であると考えられるので、『上代編』に項を立てるのがよいと言える。

そして、このことにより、『上代編』に、

**そぞろ** ソゾロカ・ソゾロケシなどの語幹。そわそわして落ち着かぬさまをいうか。「匱<sub>下</sub>之<sub>夫</sub>之<sub>會</sub>呂<sub>氣</sub>之<sub>ケシ</sub>」(『華嚴音義私記』)「恣<sub>不</sub>滑也<sub>曾</sub>呂<sub>加</sub>奈<sub>利</sub>」(『新撰字鏡』)

【考】のちにはソゾロハシ・ソゾロガマシともいう。名義抄に「漫スズロ・軟車ズロナルクルマ・無端スズロニ」、遊仙窟に「漫<sub>行</sub>来<sub>スズロアルケシ</sub>」などに見える。

とあることも修正を必要とすることになる。見出し、および、用例の振り仮名は「そぞろ」を「そぞろ」と改める。意味の記述を改め、右の【考】は削除するのがよいであろう。すなわち、

**そそろ** ソソロカ・ソソロケシの語基。口や喉を通りにくいように、なめらかでなく、すらすらとは進まないさま。漫<sub>口</sub>・聳<sub>ル</sub>とは別語と見るのがよい。

とするのがよい。さらに、和名類聚抄・類聚名義抄に名詞ソソロの例があることを【考】に記すのがよいかと見られる。